安　　心

水　野　　仙　子

「おい！」

石鹸玉のやうにふはりと輕く出た言葉が、ふと譯もない輕い心持ちにしてしまつて、いきなり彼は同僚の肩に手をかけて、口を歪めて笑つた。

「なアおい！」

其時また〳〵勢ひに乘じた心持ちが、卷舌の生醉状態の面白さを思ひ出して、どうやら足許も亂してみたくなつた。けれども白面なのは確かであつた。二人は今仕事からの歸りである。彼はまだ晝間の汗を入れがてに、白い襯着を見せて半纏を肩にかけて居る。腹掛けの黒十文字が背中に横に組んで、頸窩の深く長いのが、後ろから見た彼の特徴であつた。

折からくう――と一つ向ふの線路に電線が呻る。大蝗の肢を逆さまにしたやうなポールが、しゆうと辷つて電車は遥かの家並の陰に現はれた。と思ふうちにまた家並の陰になつた。近頃めつきり色を増した青葉の中から、踏切りの白い柵がつと揚るのが遥かに見えた。

「なア周公、昨夜はよかつたらう、面白かつたらう、なおい、どうだ振られなかつたかい？」

「ふゝ、薄笑ひしてやがら！」

彼は半纏に手を通した、すると彼の手から肩の離れた男は、圖抜けて高い背をのつそりとして、外つ方を向いて粘つた唾液を吐いた。唾液は土手の若草にかゝつた。其若草の連らなる果てに、樹立を置き、家根を並べ、その不揃へな間に際立つた、〇村の教會の尖つた屋根に、夕陽は今燃えかけて居る。

「どんなことを言つてたい？」

ふとこの言葉だけが彼の口に出た。ふとした昨夜の出來心から、薄のろの男をそゝのかして、新宿の場末に汚れた浅黄の暖簾を潜つたのから、思ひ出はそれへ〳〵と其場の情景を繰つて居るうちに、肥つた女の里訛りがこんぐらかつて、その夜の朋輩が對手の女の顏を思つた時にふつと言葉になつたのである。

「知らねえよ、己らそんなこと！」

大きな男にとつては、これは彼が出來るだけの最も適當な返辭であつた。並はづれて大きな口のあたりに、極りの惡いさうな薄笑を浮べて、小さな粒々しい目を、眞面に見られた處女のするやうに外らして、紅い空のあたりに遣つて居たが、猶口のあたりに殘つた微笑ともつかぬ微笑みが、そこに人間としての初めての快樂の思ひ出があつた。

「己れの奴がね、今度貴方に襦袢をこしらへてあげませうねえつてたよ、唐縮緬でだとさ」

言はでもの空言である。いつの日に割引の電車の中で、口のゆるい筒袖の三人連れが、あたりかまはず高聲にふざけて居た、其時の話を思ひ出したのであつた。

「だからもつとせつせつと通つてやらう」

「……………」

「どうだい…………」

彼は何かしら言はずに居られないやうな氣がした。うぶな朋輩の態度が、もの可笑しさよりもなんとなく羨しいやうな氣がするのであつた。

　ふと

「どうだい、少しばかり貸してくれないか」

と彼は男の肩に手をかけて見た。輕い氣持ちだつた。それが眞面目とも笑戯ともつかず、

「なァ、少し貸して貰へてえんだが」

ふと此時彼は妻のことを思つた。さうだ！この月が臨月である。毒々しくなつた乳首煩くまつはる二人の子供を叱る時に光る目、堪らないやうな肩で押し出す息づかひ―彼は少しく悄氣た、まだ何の用意も考へてなかつた。

「なア周公、少し融通してくんな、ちつとばから要ることがあるんだから」

彼は聲を優しくして女にする手管のやうに、掛けた手に力を入れて對手の體を揺つた。

「どうだい？」

「…………」

「すまねえがね、全くすまねえがね、己ア奴等のやうに手前を瞞すつもりぢやねえんだ、

だから初めてよこんなこと言ふなア、そしてこれがおしめへよ、全く少し要ることが出來てるんだ、な、嬶があんなだらう、今夜にも飛び出さねえとも限らねえ、うつかりしてゝ己らつひ昨夜遊んぢやつた、構はねえ誰だつてその出來心つてあらアなア、差配の爺め今朝ア己れの手先を取ツつかまへて怒鳴つてやがつたつけ、尤も己も惡いや、滞らせるのが惡いや、けれども仕方がねえ、質が出せねえつたつて………」

ふつと彼は口を切つた。恐ろしく生眞面目になつて居たことが自分でも知れた。元來彼は氣が小さかつた。さま〴〵な不義理や不自由を思ひ出すと、それが一々彼の胸の肉を鋭い齒で喰へて行つた。

　手前だつて有り餘つてるんでねえことア己だつて知つてる……だからあのそら　品でも

いゝことよ、長かあしねえ決して、決して」

繰り返した言葉に彼は力を入れた。全く決して彼は長くしない積りであつた。泣き出しさうな程小さく眞面目になつて行つた心は、ものを積むやうにたゞ目的に向つて働きを積んだ。

「頼むよ、なア」

ふと對手のむツつりして居るのが心許なくなつた。ひよいと鶴嘴の肩を替へた時に、沈み行く夕日の名殘りが背後になりかけて居るのに氣がついた。あたりを見廻すとよほどもう日は薄れて居る。目先近く踏切りの番小屋が灰色に立つて、〇村の往還に軒燈の灯が薄くちら〳〵してみえる。

「いやに黙つてるぢやねえか」

「出來ねえものをよ！」

男はのつそりして居る。彼はなんとなくむら〳〵とした。男の吝嗇なのは常から知つてゐる。意固地で、その癖うすのろで、へん、それでもあの婆あめ、子は可愛いとみえて、袷せの古などを買ひ込んぢやあ、青梅在から出て來るんだつてね、いつかそれ、己アこんな工夫なんかしねえたつてもよ、なんて大きいことを言つてやがつたつけ、へん吝嗇め！

「出來ねえたつてお前………」

「出來ねえつてばよ！馬鹿アいふない！」

「何つ？」

損失には飽く迄も頑強な態度をとる吝嗇の常、男の顏に爭はれぬ強い色を見ると、彼はたゞ譯もなく失望した。失望を補う忿怒！

「やい！」

力委せに右の手でぐいと小突くと、途端は丁度足を奪つて、わけもなく倒れかゝる男の肩に、鶴嘴が重さをなしてどうと倒れる。隙もなく體は體の上に重つた。胸の上に折つた膝と、頸にからんだ兩手の輪とが、彈機の外れた壓板のやうに力が籠ると、跳ねかへるやうに空を躁く兩足と胸に獅噛みつく兩手とが、益々無我夢中に力を添へる―――。

　彼はハツとして彈かれるやうに立ちあがつた。我にもなく四邊を見廻すと、不思議や人の影一つない。彼はかへつてそれが恐ろしいやうな氣がした。力の抜けた腕をそゝのかすやうに胸が早鐘を打つ。痳痺れた頭はぶる〳〵と慄ふ股の肉を制止するすべを知らなかつた。髪といふ髪の毛が逆立つばかり耳の下にぞつと寒い風がふく――――一目散に彼は驅け出さうとした。けれども丁度それは夢の運動のやうなものであつた。走らうとする心を體が引き止めた。動かうとすれば心が重く殘つた。彼は無暗にたゞ四邊を見廻した。人の家の灯が遥かに目の底にちら〳〵する。ふと見ると線路の土手が目の前に斜めに黒く横つて居た。

沈み終つた夕日の空の名殘りも消えて、若草の緑が黒ずんでみえた。横はつた黒い物體のまはりを、彼は輪を劃いてぐる〳〵とめぐつた。その黒い影に解けあふやうに日は全く暮れた。

―――――――――――――――――――

すが〳〵しい青葉の世界、初夏の朝に目覺めた〇村が、貫かれた線路に氣持ちよく身輕な電車をすべらしてゐる。それが遙に見えた。村の一部と青い空地と畑とを圍んで獨立した鐡道線路には、長い客車が走り去つたあとに四本のレールが光つて居た。

ふとひよつこりと現はれた人影、それがすた〳〵と歩いて來て、やがてらふやうに四邊を見廻した。線路を外れて若草の續きに足を入れて行つたが、草にせばめられた溝の淺い水の流れを、あちこち這うて居た目がふと留まると、體をしやつきりとさせてまた四邊に人のないのを確めた。

人影はやがてすた〳〵ともと來た方へ引つかへして行つた。

―――――――――――――――――――

「丁度私が起きたばかりで、顏を洗はうと思つて井戸傍に出て來た時でした。奴がのつそ

りと木戸口からはいつて來て、親方大變ですつて眞青な顏して私の前につゝ立つてるんです。尤も眞青な顏もしてる筈でさア、その顏つてねえもんだから、私は一寸ぎよつとしましてね、どうしたんだつて聞くと、人が死んでる人がつて言ふんでさ、人が死んでたつてそんなに驚くにも當るめい、一體何處にだいつて聞きますとね、これこれの溝ん中に足が見えるつて話なんでさ、私あ一圖に乞食の行き倒れでゞもあらうと思ひましてね、ほつとけやい、かゝり合ひにでもなると惡るいやつて言ひますとね、その全く乞食の行き倒れだと思ひ込んぢやいましたんで………奴是非私に行つてみてくれつて言やがるんです、かまことあねえや、手前仕事の出先なら行きがけに交番に聲かけて行きねえつていひましたんですがね、奴どうにもかうにも私に行つて見てくれつて聞かねえんです。私も面倒だと思ひましたが、その一寸やつぱり好奇心で、それぢやあつて出掛けた譯なんでしたが、道々幾つばかりの男だいつて聞くと、二十三四だらうつて云ふんです。私もその時あ氣が付きませんでしたが、今になつて考へて見ると、あゝして溝ん中につゝぷして居る者の年がさつぱりわかる筈がありませんや、引き起しても見もしねえでね、爭はれねえもんですな、恐ろしいこつてす。だが奴も飛んでもねぇことをし出來したもんで………それぢやアお上ぢやもうちやんとお調べがついてるんですかい、眞實に飛んでもねえことをやらかしたもんで……奴あ決して惡人ぢゃありませんよ、私も去年の手不足の時に一寸使つてやりましたばかりなんで、その決して深い關係があるわけぢやねえんですがね、決して人を殺さうなんて思つて殺すやうな男ぢやねえと私は思つてるです。途端でさア必と何かの氣負つて來ると馬鹿に調子に乘る男でしてね、短氣だけに手は早いやうでしたが、何にしても飛んだこつてす、奴が殺つたんですかねえ、で奴あもうられましたんで？

〇村の植木職直次郎が、Ｓ警察署の尋問所で申立てたことは右の通りであつた。

植直はほつとして巖めしい署長の前を離れて尋問所を出る時に、手錠をはめられてしほ〳〵と警官にひかれて來る彼に會つた。

出會ひ頭にふと顏をあげた彼は、

「あ、親方、私もこれでやうやう安心しました」

かう言つて彼はがつくりと首をれた。

入力者注：本文の一部にルビを追加しました。　（　）

「水野仙子全集」第三巻より

初出：「青鞜」明治四十四年十一月

テキスト入力：小林　徹

公開：平成二十九年六月十八日

改訂：令和五年六月二十二日